

主語対非主語の非対称性が示す言語多様性と言語普遍性

—優位効果と Comp-痕跡効果に関する通言語的考察—

Language Variability and Uniformity in Subject/Non-Subject Asymmetry

—A Cross-linguistic Study of Superiority and Comp-trace Effects—

九州大学人文科学研究院専門研究員 山本 将司

長崎大学 稲田 俊明

Shoji Yamamoto (Kyushu University/Visiting Researcher) ·

Toshiaki Inada (Nagasaki University)

1. 序論

優位効果(1)や *Comp*-痕跡効果(2)といった主語と非主語の非対称性を示す現象を説明するために、これまで提案されてきた「最短牽引の条件」やそれを補足する諸仮説の問題点を指摘し、通言語的考察に基づいて代案を提示する。

- (1) a. Did he say [who_i t_i saw what]?
- b. *Did he say [what_i who saw t_i]?
- (2) a. Who_i do you think [(that) Bill saw t_i]?
- b. *Who_i do you think [(*that) t_i saw John]?

本稿で仮定する主たる原理は次の通りである (Chomsky (1995, 2001), Pesetsky and Torrego (2001))。

- (3) 派生の経済性

普遍文法 (Universal Grammar) は最少の労力で派生される文を最適として選択する。

- (4) 補文標識の特性

補文標識は、節タイプの表示と共に時制に関わる統語素性を持つ。

優位効果をはじめとする主語対非主語の非対称性は、派生の経済性(3)に則った派生間の競合の結果である。そして、Chomsky (2008) 等に倣い、(4)のように補文標識は節タイプと時制に関わる統語素性を持つと仮定する。本稿は、この二つの素性は主語の移動によって最も効率良く照合され、他の競合する派生より主語移動を含む派生は優位となると主張する。

従来の「最短牽引の条件」では、主語を含まない疑問詞間（例えば対格疑問詞と与格疑問詞の対）における優位効果の消失(5)を適切に予測できないが、本稿の分析では自然に説明できる。

- (5) a. To whom did John show what?
b. What did John show to whom?

また、最短牽引の条件では説明できない通言語的差異も、当該言語の補文標識の特性の違いと派生の経済性との相関から予測される。特に、本稿の主張より以下の通言語的含意関係が予測される。

- (6) 優位効果を示さない言語はいかなる主語対非主語の非対称性も示さない。

以下ではこの予測の検証も通言語的事実に基づいて合わせて行う。

2. 最短牽引の条件と多重疑問詞前置言語における優位効果

自然言語には、主語と非主語の間に非対称性を示す事象が存在する。例えば、英語の二重疑問詞疑問文に見られる優位効果(7)や埋め込み節の主語の抜き出しに関わる *that*-痕跡効果(8)がその具体例として挙げられる¹。

- (7) a. Did he say [who_i t_i saw what]?
b. *Did he say [what_i who saw t_i]?
(8) a. Who_i do you think [(that) Bill saw t_i]?
b. *Who_i do you think [(*that) t_i saw John]?

これまで英語の優位効果(7)を説明する統語条件として Chomsky (1995) の最短牽引の条件 (Attract Closest) (9)が採用されてきた。

- (9) α can raise to target K only if there is no legitimate operation Move β

targeting K, where β is closer to K. Chomsky (1995: 296)

この条件に従うと、多重疑問詞の中で主語疑問詞が他の疑問詞より構造上優位となり、従って主語疑問詞にのみ wh-移動が適用される。即ち、主語疑問詞が優位となる。

しかしながら、この条件は、その間に階層性が存在する限り、主語疑問詞を含まない二重疑問詞の間にも優位性を定義してしまうため、下記の事例を説明することができない²。

- (10) a. To whom did John show what?³
 b. What did John show to whom?
- (11) a. John showed them_i to each other_i?
 b. *John showed each other_i to them_i?

束縛条件違反に起因する容認性の相違(11)より、明らかに対格目的語と前置詞と格名詞の間には階層性が存在する。従って、最短牽引の条件(9)によって(10)の目的語疑問詞は前置詞と格疑問詞より優位になると予測されるが、この予測に反し(10)には優位効果が観察されない。

上記の問題に加え、最短牽引の条件(9)は通言語的な面でも問題を抱えている。Rudin (1988) 以来、ブルガリア語やセルボ=クロアチア語、ルーマニア語、チェコ語、ポーランド語等、義務的に疑問文内の多重疑問詞全てが節頭へ移動する「多重疑問詞前置言語 (Multiple Wh-fronting Language)」には優位効果現象に関して下記のような興味深い言語間差異が存在することが知られている。

- (12) a. Koj kogo vižda? b. *Kogo koj vižda? (Bulgarian)
 who whom sees
 ‘Who sees whom?’ Rudin (1988: 472(54))
- (13) a. Ko koga vidi? b. Koga ko vidi? (Serbo-Croatian)
 who whom sees
 ‘Who sees whom?’ Rudin (1988: 473(55))

ブルガリア語の二重疑問詞疑問文(12)では主語疑問詞が非主語疑問詞に対して優位となるが、セルボ=クロアチア語(13)では主語優位性が観察されない。

この事実に基づき、Rudin (1988) は多重疑問詞前置言語を優位効果を示すブルガリア語タイプの言語と優位効果を示さないセルボ=クロアチア語タイプの言語に分類している。

しかしながら、Rudin (1988) の現象記述と言語分類には不十分な点がある。Bošković (1997)、Stjepanovic (2003) によると、Rudin (1988) が優位効果を示さない言語としたセルボ=クロアチア語においてさえ優位効果が消失する統語環境は寧ろ限定的であり、例えば、節境界を越えた長距離 wh-移動(14)、間接多重疑問詞疑問文(15)、そして補文標識 *li* が標識された主文多重疑問詞疑問文(16)といった広範な統語環境で優位効果が観察される。

(14) a. Ko si koga tvrdio da je istukao? (Serbo-Croatian)
 who are whom claim that is beaten
 'Who do you claim that beat whom?'

b. *Koga si ko tvrdio da je istukao? Bošković (1997: (8))

(15) a. Ko koga voli, taj o njemu govori.
 who whom loves that-one about him talks
 'Everyone talks about the person they love.'

b. ?*Koga ko voli, taj o njemu/o njemu taj i govori. Bošković (1997: (16))

(16) a. Ko li šta kupuje?
 who C what buys
 'Who on earth buys what?'

b. *Šta li ko kupuje? Stjepanovic (2003: (8))

上記の事実から、セルボ=クロアチア語の優位効果消失は補文標識を欠いた主文にのみ観察される現象であり、この言語も主語優位性を保持した言語の一つであると考えられる。

ここで、前章で触れた Chomsky (1995) の最短牽引の条件(9)が抱える問題が多重疑問詞前置言語であるブルガリア語やセルボ=クロアチア語にも存在することに注目する。

(17) a. Koj kogo kakvo e pital? (Bulgarian)
 who whom what AUX asked

to whom what is given Ivan

'What has Ivan given to whom?'

b. Kakvo na kogo e dal Ivan?

what to whom is given Ivan Grewendorf (2001: 97, n-19)

即ち、(19)の対格疑問詞 *kakvo* は前置詞与格疑問詞 *na kogo* より構造的に上位であるが、(19)の派生において最小保障の原理が作用するために必要な他の依存関係は存在しない。従って、(19a) は最短牽引条件に違反するために非文法的であると予測されるが、この予測に反して (19a) は適格な文として容認される⁴。

このように Richards (2001) の最小保障の原理はブルガリア語の三重疑問詞疑問文(17)を取り扱うには有効であるが、英語やブルガリア語に見られる非主語疑問詞間の優位効果消失を取り扱うことはできない。Richards (2001) の最小保障の原理が非主語疑問詞間の優位効果消失を取り扱うことはできないのは以下のポーランド語の例(20)に関しても同様である。

(20) a. Kogo komu przedstawiteś? (Polish)

whom to whom introduced

'Whom did you introduce to whom?'

b. Komu kogo przedstawiteś?

to whom whom introduced Rudin (1988: 474 (59))

結局、最小保障の原理を採用するか否かに関わらず、最短牽引の条件から二つの非主語疑問詞の間には優位性が観察されないという問題を解決することはできない。

3. 優位効果と派生の経済性

前節末で取り上げた問題を解決するために、本章では以下の仮説を採用する。

(3) 派生の経済性 (Derivational Economy) :

普遍文法 (Universal Grammar) は最少の労力で派生される文を最適

として選択する。

さらに、Pesetsky and Torrego (2001) に倣い、英語やブルガリア語、セルボ=クロアチア語のように優位効果を示す言語の補文標識 C は時制辞 T、もしくは主語 DP と一致可能な解釈不可能素性 [uT] を持つと仮定する。

- (21) 主語 DP と時制辞句主要部 T は補文標識 C が持つ解釈不可能素性 [uT] を照合することが可能である。⁵

仮定(21)より、優位効果を含めた主語対非主語間の非対称性を示す統語現象の多くを派生の経済性(3)の下で説明することが可能となる。その例として、Pesetsky and Torrego (2001) が取り上げた英語の *that*-痕跡効果(22)を見る。

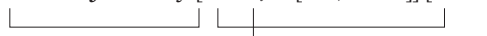
- (22) Who did John say (*that) _ will buy the book?

(22)の埋め込み文の補文標識は主語疑問詞 *who* の移動を駆動する素性 [u-wh] に加え、(21)に仮定された解釈不可能素性 [uT] を併せ持つ。そして、Pesetsky and Torrego (2001) によると英語の埋め込み文の時制辞 T は基底位置で助動詞として現れると同時に、補文標識 C へ主要部移動し T-C 複合体を形成することにより補文標識 *that* としても具現化する⁶。

- (23) a. Who_i did John say [_i C [uT, u-wh] [_i will buy the book]]?



- b. Who_i did John say [_i T_j-C [uT, u-wh]] [_i will_j buy the book]]?



一方、主文の時制辞 T は、(23)に現れた *did* のように基底位置では音声的に空であるが、T-C 複合体が形成された主文主要部の位置で助動詞として具現化する。仮定(21)に従うと補文標識 C が持つ素性 [uT] は主語 DP の移動、もしくは時制辞 T の移動によって照合されるが、主語疑問詞 *who* が移動すると素性 [uT] に加えて素性 [u-wh] も同時に照合される。この場合、(23 b) のように主語疑問詞 *who* の移動に加えて時制辞 T を移動することは余剰的であり、派生の経済性(3)より文法は T の移動を含まない派生 (23a) を最適なものとして選択する。その結果、主語疑問詞 *who* の移動と T-C 複合の具現化である補文標識 *that* の両立は許されず、従って *that* と主語痕跡の連続は非文法的となる⁷。

次に、優位効果とその消失を派生の経済性に基づいて説明する。まず、英語における優位効果を確認する。

(24) a. Who bought what?

b. *What did who buy?

(25) a. [_{CP} who_i C [uT, u-wh] [_{TP} t_i T [_{VP} buy what [wh]]]]

b. [_{CP} what_i [_{T_J-C} [uT, u-wh] [_{TP} who [wh, uT] t_j [_{VP} buy t_i]]]]

優位効果も *that*-痕跡効果と同様に派生 (25a) と (25b) の競合の結果として帰結される。派生 (25a) では主語 *who* の移動が C の二つの解釈不可能素性 [uT] と [u-wh] を照合する。一方、派生 (25b) では素性 [uT] と [u-wh] を照合するために、目的語 *what* と時制辞 T の二つの移動が生じている。この二つの派生を比較すると、余剰的な移動を含む派生 (25b) は派生の経済性より排除され文法は派生 (25a) を選択する。その結果、主語疑問詞 *who* の移動が目的語疑問詞 *what* の移動よりも優位となる。

最後に、多重疑問詞前置言語であるブルガリア語、セルボ=クロアチア語における優位効果とその消失を考察する。Tomic (1996) によると、ブルガリア語では前置された多重疑問詞の間に接続詞 *li* や連結動詞 *e* 等の前節語を置くことができないが、(16)で示したようにセルボ=クロアチア語では接続詞 *li*、連結動詞 *si*、*je* 等を節頭の疑問詞の直後に置くことが可能である。

(16) a. Ko li šta kupuje? (Serbo-Croatian)

who C what buys

'Who on earth buys what?'

b. *Šta li ko kupuje? Stjepanovic (2003: (8))

ここで、これらの前節語、特に接続詞として機能する *li* と多重疑問詞の語順に基づいて、ブルガリア語とセルボ=クロアチア語の多重疑問詞疑問文の文構造に関して以下の仮定を行う。

(26) a. ブルガリア語では前置された全ての疑問詞が先頭の疑問詞の投射に含まれる。そして、この投射が CP の指定部を占める。

[_{CP} [WH_i [WH_j WH_k]]_i [_C[[u-wh, uT]] [_{TP} t'_i [_T ...t_i ... t_j ... t_k ...]]]]

- b. セルボ＝クロアチア語では節頭の疑問詞のみが CP の指定部を占め、それ以外の疑問詞は CP より下に位置する機能範疇の指定部を占める⁸。

[_{CP} WH_i [_C C[u-wh, uT]] [_{TP} t_i WH_j WH_k [_T ...t_i ... t_j ... t_k ...]]]

英語と同様にブルガリア語の多重疑問詞疑問文でも補文標識 C が持つ二つの解釈不可能素性 [uT] と [u-wh] は主語疑問詞の移動によって同時に照合される。従って、ブルガリア語では (26a) に仮定する多重疑問詞の束 [WH_i [WH_j WH_k]]' が主語疑問詞の投射であり、この疑問詞の束が CP の指定部へ移動した場合に、C が抱える素性は最も効率的に照合される。そして、この多重疑問詞の束の中の非主語疑問詞の語順に関する制約は存在しない。即ち、ブルガリア語の三重疑問詞疑問文において非主語疑問詞の語順は自由である。

- (27) a. Koj kogo kakvo e pital? (Bulgarian)
 who whom what AUX asked
 'Who asked whom what?'

- b. Koj kakvo kogo e pital?

一方、(26b) に示すようにセルボ＝クロアチア語では多重疑問詞の全てが一旦 CP より下位の機能範疇の指定部へ移動し、その後、その中の一つだけが CP 指定部へ移動する。この場合も CP 指定部へ主語疑問詞が移動した時に補文標識 C が抱える素性が最も効率的に照合される。従って、セルボ＝クロアチア語でも主語疑問詞の移動が優位となる。

このような主語優位性に加えて、派生の経済性の原理(3)より優位効果を導くとする本稿の主張は次のような予測を行う。即ち、ブルガリア語では二重疑問詞の間に主語が含まれなければ素性照合に関する経済性の差が存在せず、従って、非主語からなる二重疑問詞の間には優位性が観察されない。そして、下記に示すようにこの予測は事実と合致する。

- (19) a. Na kogo kakvo e dal Ivan? (Bulgarian)
 to whom what is given Ivan

'What has Ivan given to whom?'

b. Kakvo na kogo e dal Ivan?

what to whom is given Ivan Grewendorf (2001: 97, n-19)

しかしながら、派生の経済性(3)だけではセルボ=クロアチア語の主文に観察される優位効果消失を捉えることはできない。

(13) a. Ko koga vidi? b. Koga ko vidi? (Serbo-Croatian)

who whom sees

'Who sees whom?'

この問題を解決するために、優位効果は埋め込み文や明示的な補文標識を備えた主文といった完全な CP 構造を備えた節 (Full-fledged CP) に現れ、CP を欠いた不完全な構造しか持たない節では優位効果が消失するとした Bošković (1997) に従い、セルボ=クロアチア語の主文多重疑問詞疑問文(13)は不完全な節構造(28)を持つと仮定する。

(28) a. [_{TP} Ko_i koga_j [_{TP} vidi t_i t_j]]?

b. [_{TP} Koga_j ko_i [_{TP} vidi t_i t_j]]?

補文標識 C を欠いた構造 (28a)、及び (28b) には素性 [uT] が含まれないので、素性 [uT] を要因とする経済性の差異は生じない。従って、セルボ=クロアチア語の主文多重疑問詞疑問文(13)では派生の経済性(3)に基づいた優位性は観察されない⁹。

4. 派生の経済性より導かれる通言語的含意関係

前節では、補文標識の素性照合に関する派生間の経済的差異が優位効果の主要因であることを論じた。そして、このような経済的差異は主語 DP が素性 [uT] を照合可能であると規定する仮定(21)より導かれる。しかしながら、この仮定が全ての自然言語に対して普遍的に適用されるとすれば、優位効果を示さない自然言語が相当数存在するという通言語的事実を捉えることができない。

(29) a. Ich frage mich [wer was gekauft hat]. (German)

- I wonder myself who what bought has
 'I wonder who bought what.'
- b. Ich frage mich [was wer gekauft hat].
 I wonder myself what who bought has
 Lit. 'I wonder what who bought.' Grohmann (1997: 98 (2))
- (30) a. Juan sabe qué dijo quién. (Spanish)
 Juan knows what said who
 Lit. '*Juan knows what who said.'
- b. Juan sabe quién dijo qué.
 Juan knows who said what
 'Juan knows who said what.' Jaeggli (1982: 156 (4.105))
- (31) a. Jón veit ekki hver bauð hverjum í veisluna. (Icelandic)
 John knows not who invited whom in the-dinner
 'John does not know who invited who to the dinner.' (PL/SP)
- b. Jón veit ekki hverjum bauð hver í veisluna.
 John knows not whom invited who in the-dinner
 'John does not know who invited who to the dinner.' (?PL/SP)
 Grebenyova (2006: 39 (38))¹⁰

上記のように、ドイツ語、スペイン語、アイスランド語の埋め込み多重疑問詞疑問文では優位性に反した移動が許される。そこで本稿は、仮定(2)の適用の違いがこのような優位効果に関する通言語的差異を生じさせると考える。

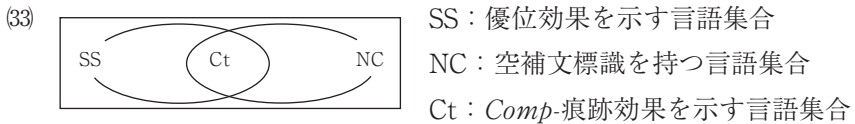
- (2) 主語 DP と時制辞句主要部 T は補文標識 C が持つ解釈不可能素性 [uT] を照合することが可能である。

即ち、英語やブルガリア語、セルボ＝クロアチア語とは異なり、ドイツ語、スペイン語、アイスランド語等の優位効果を示さない言語には仮定(2)が適用されない。従って、これらの言語では補文標識が持つ解釈不可能素性 [uT] の照合に帰着される経済性の差は生じず、従って優位効果も観察されない。

このように仮定(2)が言語毎にパラメトリックに適用されると考えると、次のような通言語的な予測が導かれる。

(32) 優位効果を示さない言語はそれ以外の主語対非主語間の非対称性も示さない。

本節では、この予測に於ける非対称性に相当する現象として *that*-痕跡効果、通言語的には *Comp (lementizer)*-痕跡効果を取り上げる。英語の *that*-痕跡効果(22)では補文標識 *that* は解釈不可能素性 [uT] の照合過程で形成された T-C 複合の形態的具現化であり、空の補文標識は主語の移動により素性 [uT] が照合された場合に現れると仮定した。この仮定に従うと、*Comp*-痕跡効果は空補文標識を許す言語において補文節の派生で生じた競合を派生の経済性(3)に従い評価した結果であると説明される。これは、(33)に図示される通り、通言語的に見ると *Comp*-痕跡効果を示す言語の集合 Ct は優位効果を示す言語の集合 SS と空補文標識を許す言語の集合 NC の共通部分 (Intersection) に相当することを意味する。



Ct が SS と NC の共通部分であれば Ct は必ず SS の真部分集合であり、従って、SS に含まれない言語が Ct に含まれることはない。これは予測(32)から導かれる優位効果と *Comp*-痕跡効果に関する通言語的關係に他ならない。具体的には、優位効果を示さない言語であるドイツ語、スペイン語、アイスランド語は *Comp*-痕跡効果も示さないと予測される。そして、この予測が正しいことは(34)、及び(35)より示される。

(34) Wer_i glaubst du [_{CP} daß t_i gewinnen würde]? (German)
 who believed you that win would
 Lit. '*Who did you believe that would win?'

(35) a. Hver_i sagðir Þú að t_i hefði borðað Þetta epli? (Icelandic)
 who said you that had eaten this apple
 Lit. '*Who did you say that had eaten this apple?'

b. Hvaða_i bragð sagði hann að t_i væri gagnslaust?
 which maneuver said he that was useless

Lit. *‘Which maneuver did he say that was useless?’

Maling and Zaenen (1978: 387-388 (21)-(22))

ドイツ語やアイスランド語はスクランプリング移動を示す言語であるが、(36)に示されるようにスクランプリング言語ではないスペイン語でも *Comp*-痕跡効果は観察されない。

(36) a. ¿Quién dijiste que llegó ayer? (Spanish)
 who said that arrived yesterday

Lit. *‘Who did you say that arrived yesterday?’

Jaeggli (1982: 153 (4.97a))

b. ¿Quién dijiste que vio a Juan?

who said that saw at Juan

Lit. *‘Who did you say that saw Juan?’ Sobin (2009: 54 (31))

一方、優位効果を示す言語が *Comp*-痕跡効果を示すか否かは選択的であり、これは予測(32)と矛盾しない。例えば、英語は優位効果と *Comp*-痕跡効果の何れも示す言語であり SS と Ct の共通部分に属する。そして、英語と同タイプの言語としてデンマーク語が存在する。

(37) a. Hvilken kok_i tror du (*at) t_i har kogt de her grønsager?
 (Danish)

which cook think you (that) has cooked these here vegetables
 ‘Which cook do you think (*that) has cooked these vegetables?’

Lohndal (2007: 51 (4))

b. Hvem_i tror du (*at) t_i ofte tager til Paris?

who think you (that) often goes to Paris

‘Who do you think (*that) often goes to Paris?’ Vikner (1995: 12 (4))

c. Hvordan_i tror du (at) Peter tog til Paris t_i?

how think you (that) Peter went to Paris

‘How do you think (that) Peter went to Paris?’ Vikner (1995: 12 (6))

デンマーク語では補文標識 *at* によって標識された定形節からの主語の抜き出しは許されないが ((37a, b))、補文標識 *at* の有無に関わらず定形節か

らの目的語の抜き出しは可能である ((37c))。そして、*Comp*-痕跡効果に加えて優位効果もデンマーク語では観察される¹¹。

- (38) a. Hvem købte hvad? (Danish)
 who bought what
 'Who bought what?'
 b. ?Hvad købte hvem?
 what bought who
 Lit. '*What did who buy?' Erteschik-Shir (2007)

これに対して、ブルガリア語、セルボ=クロアチア語は *Comp*-痕跡効果を示さず、優位効果のみを示す言語である。

- (39) a. Koj misliš će e došül? (Bulgarian)
 who think that has come
 Lit. '*Who do you think that has come?' Rudin (1988: 454 (21a))
 (40) a. čov (j)ek kojii mislim da t_i vas je vidio... (Serbo-Croatian)
 the man who think that you AUX saw
 Lit. '*the man who I think that saw you ...'
 b. (T)ko_i mislite da t_i me je zam (ij)eni?
 who think that me AUX replaced
 Lit. '*Who do you think that replaced me?'

ブルガリア語とセルボ=クロアチア語の定形節はそれぞれ補文標識 *če*、*da* によって標識されるが、両言語とも補文標識が明示された定形節からの主語の抜き出しを許す。従って、ブルガリア語、セルボ=クロアチア語は共に Ct の補集合と SS の共通部分の要素となる。

類似した様相を示す言語としてオランダ語が挙げられる。オランダ語はドイツ語と同様にスクランプリングを許す言語である一方、ドイツ語と異なり優位性を保つ言語である。

- (41) a. Ik vraag me af [wie wat gekocht heeft.] (Dutch)
 I asked me who what bought have
 'I wondered who bought what.'

b. *Ik vraag me af [wat wie gekocht heeft].

Lit. *I wondered what who bought.'

しかしながら、英語やドイツ語と異なり定型節を標識する補文標識 *dat* は、抜き出しが生じるか否かに関わらず、その省略が許されない。従って、オランダ語は補文標識 *dat* の有無に関する対比である *Comp*-痕跡効果を保持する言語であるとはいえない。

(42) a. Wie_i dacht je [**(dat)* t_i zou winnen]? (Dutch)

who thought you (that) would win

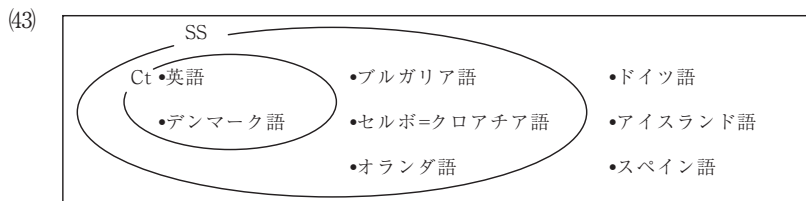
Lit. *Who did you think that would win?

b. Wat_i dacht je [**(dat)* hij zou kopen t_i]?

What thought you (that) he would buy

'What did you think that he would buy?

ここで図(33)を集合 SS と集合 Ct の含意関係に注目して書き直し、上に挙げた言語を書き込んでいくと次のようになる。



図(43)において、優位効果と *Comp*-痕跡効果の両方を示す英語とデンマーク語は Ct に属するが、どちらも示さないドイツ語、アイスランド語、スペイン語は SS の補集合に属する。そして、優位効果は示すが *Comp*-痕跡効果は示さないブルガリア語、セルボ=クロアチア語、オランダ語は Ct の補集合と SS の共通部分に属する中間的な言語である。

次に、予測(32)の反証可能性について考察する。図(33)において Ct は SS の部分集合であり、これは *Comp*-痕跡効果を示しながら優位効果が観察されない言語は存在しないことを含意する。従って、このような言語の存在を示すことにより予測(32)は反証される。そして、予測(32)の反例となりうる特性を持った言語としてロシア語が存在する。

(44) a. Kto komu darit podarki? (Russian)
who whom give presents
'Who gives presents to who (m)?'

b. Komu kto darit podarki?
whom who give presents
Lit. '*To who (m) does who give presents?' Scott (2012: 1 (1))

(45) *Kto_i ty dumaeš', čto t_i videl Elenu?
who you think that see Elena
Lit. '*Who do you think that saw Elena?' Szczeegielniak (1999 (9c))

二重疑問詞疑問文(44)と補文節からの主語の抜き出し(45)の容認性に従うと、ロシア語は一見すると優位効果を示さないが *Comp*-痕跡効果を示す言語のように思われる。しかしながら、先述したセルボ=クロアチア語と同様、ロシア語において優位効果が消失する統語環境は限定的である。

(46) a. Ja ne znaju, kto komu darit podarki. (Russian)
I Neg know who whom give presents
'I don't know who gives presents to who (m).'

b. ?*Ja ne znaju, komu kto darit podarki.
I Neg know whom who give presents
Lit. '*I don't know to who (m) who gives presents.' Scott (2012: 2 (2))

(47) a. Podarki, kto komu darit?
presents who whom give
'As for presents, who gives them to whom?'

b. *Podarki, komu kto darit?
presents whom who give
Lit. '*As for presents, to whom does who give them?'

Scott (2012: 2 (3))

ロシア語の埋め込み多重疑問詞疑問文(46)では、主格疑問詞 *kto* を越えて与格疑問詞 *komu* が移動した (46b) は主語優位性を保った (46a) に比較して容認性が著しく低下する。更に、対格目的語 *podarki* が文頭へ話題化移動

した(47)でも主語優位性に反する与格疑問詞 *komu* の移動は容認されない。このような事実に従う限り、ロシア語も他の多重疑問詞前置言語と同様、優位効果を示す言語に分類すべきである。

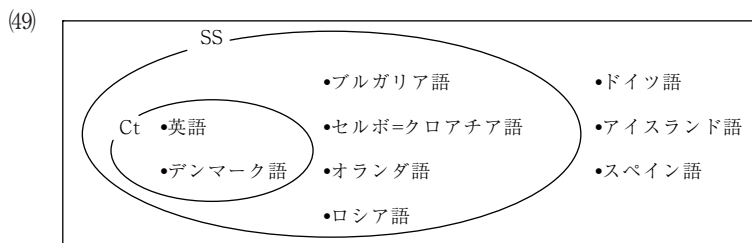
また、(45)のみに基づいてロシア語が *Comp*-痕跡効果を示すと結論することも適切ではない。何故なら、ロシア語では一般的に補文標識 *čto* が明示された定形節からの抜き取りはその対象が主語であるか否かに関わらず許されないからである。

- (48) a. *Kogo_i ty dumaeš, čto privedè Elena t_i? (Russian)
 who you think that bring Elena
 ‘Who do you think that Elena will bring?’
 b. *Kuda_i ty skazal, čto pojdèt Elena t_i?
 where you say that go Elena
 ‘Where did you say that Elena would go?’

Szcczeegielniak (1999 (9a,b))

čto 定形節から対格疑問詞 *kogo* が抜き出された (48a)、並びに疑問副詞 *kuda* が抜き出された (48b) は共に容認されない。このようにロシア語では *čto* 定形節からの抜き出しは許されず、(45)の非容認性も(48)と同様に節の定形性制約に基因すると考えるのが妥当であり、*Comp*-痕跡効果に求める必要はない。即ち、図(49)に記すようにロシア語はブルガリア語、セルボ=クロアチア語と同様に優位効果は示すが *Comp*-痕跡効果は認められない言語である。従って、ロシア語は予測(32)の反例とは成らない。

以上、優位効果を示す言語 (SS) と *Comp*-痕跡効果を示す言語 (Ct) の含意関係(43)にここで検討したロシア語を加えると以下の図のようになる。



5. 結語

本稿は最小主義における派生の経済性(3)という一般的な原理の帰結として「優位効果」が説明できることを示した。また、多重疑問詞移動言語を含む典型的に異なるいくつかの言語を観察することにより、優位効果や *Comp*-痕跡効果のような主語優位現象が観察される言語群には含意関係が成立することを指摘した。

本稿のアプローチでは、主語 DP は補文標識 C が持つ素性を照合可能であるという仮定(21)が重要な役割を果たす。この仮定に従うと、優位効果を含む主語対非主語間の非対称性は主語の移動と非主語の移動の間にある補文標識 C が持つ素性の照合に関する効率性の差異に帰結される。しかしながら、主語対非主語間の非対称性を示すか否かは言語毎に異なり、これは補文標識 C の素性照合に関する仮定(21)の適用が言語間で選択的であり、そのような選択性が言語間差異を生むことを示唆する。この示唆が正しいことを、予測(32)が導く優位効果と *Comp*-痕跡効果に関する通言語的含意関係(49)の存在を確かめることによって検証した。

* 本研究は、平成27年度学術振興会科学研究費助成金による研究「文構造と意味・談話インターフェイス研究」(基盤研究(C)代表者：稲田俊明)の助成を受けている。また、本稿の作成においては英語、オランダ語の例の容認性の判断などにおいて同僚の William Collins、山下龍、両氏の助言を受けた。ここにお礼を申し上げたい。

¹ 独立疑問文の主語助動詞倒置も、主語対非主語の非対称性を示す統語現象と見做すことができる。

² Chomsky (1977) が提案する優位条件は(10)の事例と矛盾しない。

(i) No rule can involve X, Y in the structure

... X ... [_α ... Z ... -WYV ...] ...

where the rule applies ambiguously to Z and Y and Z is superior to Y.

Chomsky (1977: 101)

(ii) ...the category A is “superior” to the category B in the phrase marker if

every major category dominating A dominates B as well but not conversely
 ... Chomsky (1977: 101)

目的語と前置詞与格は“major category”である動詞句 VP の投射内にあるので (ii) は適用されず、従って、(10)に優位性は観察されない。

³ 同様の例は Storik (1996) にも紹介されている。

(i) To whom_i did Lou give what? Stroik (1996: 102 (64a))

⁴ 英語において対格目的語と与格目的語との間の構造関係は弱交差効果 (weak cross over effect) によって確認できる。

(i) a. *To whom_i did John recommend his_j colleague?

b. Whom_i did John recommend to his_j colleague?

⁵ 仮定(21)は非常に規定的 (stipulative) な仮定であると思われるかもしれない。だが、この仮定は Chomsky (2008) のフェイズ理論で仮定されている素性継承 (feature inheritance) より自然に導かれる可能性がある。即ち、主格素性 [uNom] は CP フェイズ内で解決されるべき唯一の解釈不可能な格素性であり、この素性は補文標識 C から時制辞 T へ素性継承される。この時、素性継承をフェイズ主要部から他の主要部への素性の複写 (copy) であると考え、フェイズ主要部に複写の元 (original) が削除されずに残留する可能性も考えられる。この場合、主格名詞句によってのみ照合可能な素性が C と T に同時に存在することとなり、これが仮定(21)がフェイズ理論に与える示唆である。

⁶ 時制辞 T と主語 DP との間的一致は動詞の屈折に反映される場合が多いが、このような一致が主格 DP に形態的に具現化する例として Pesetsky and Torrego (2001) はピタピタ語 (Pitta-Pitta) の主格 DP へ付与される未来時制接尾辞を挙げている。

⁷ Bresnan (1977)、Culicover (1993) によると、補文標識 C と主語痕跡の間に文副詞が介在すると *that*-痕跡効果と全く逆の文法性の対比が現れる。

(i) Who_i do you think ²³(that) {probably/for all intents and purposes} _{t_i} wrote *Barriers*?

このような anti-*that*-痕跡効果は空補文標識 Φ を条件 (ii) に従う前節辞であると仮定することによって説明される。

(ii) *Condition on the affixation of null complementizer Φ*

Null complementizer Φ with an uninterpretable feature [uT] must be adjacent to an element that has a tense feature [(u)T] in order for Φ to prefix to the element.

文法は (i) の派生において条件 (ii) に違反する空補文標識ではなく T-to-C 移動

によって補文標識 *that* が実現する派生を選択する。

- ⁸ ここでは、CP の下位の機能範疇が TP であるか FocP であるかは問題にしない
- ⁹ 興味深いことに、英語でも問返し疑問詞疑問文 (echo-wh-question) では優位効果が生じない (“WHO” は強勢形を、文末の “??” は問い返し疑問文が持つ上昇音調を示す)。

(i) A: What did Dracula drink at the party?

B 1: What did WHO drink at the party??

B 2: *WHO drank what at the party??

(ii) A: Sue asked what Dracula drank there?

B 1: She asked what WHO drank there??

B 2: *She asked WHO drank what there??

問返し疑問文には純粹疑問文とは異なる reprise-type 疑問文特有の性質がある (Sobin (2010))。しかし、優位効果の消失は本稿で仮定する補文標識 C の特性(2)の変異から説明可能である。即ち、問返し疑問文は文タイプとして疑問文ではなく、従って、(i, ii) の問い返しの疑問詞 WHO は素性 [uT] の照合に参加しない。この場合、(iB2, iiB2) のような疑問詞 WHO の移動は完全に余剰的であるので文法から排除される。これは、(2)の通言語的な変異可能性は単に補文標識を言語ごとに二つに類別するわけではないという点で重要である。

- ¹⁰ 表記 PL、及び SP はそれぞれペアリスト解釈、単一ペア解釈を表す (Grebnyova (2006))。

- ¹¹ Erteschik-Shir (2007) によると、英語と異なりデンマーク語では D-連結された疑問詞 (D-linked wh-phrase) を用いても従属節における優位効果は消失しない。

(i) a. Jeg ved ikke hvilken pige hvilken bog købte. (Danish)

I know not which girl which book bought

‘I don’t know which girl bought which book.’

b. *Jeg ved ikke hvilken bog hvilken pige købte

I know not which book which girl bought

‘I don’t know which book which girl bought.’

Erteschik-Shir (2007: 183 (71))

このような D-連結された疑問詞に纏わる優位効果とその消失現象は Pesetsky (1987) 以来、多くの提案がなされてきたが、この問題を通言語的に考察することは本稿の範囲を超えるため、将来の課題とするに留めたい。

References

- Bošković, Željko (1997) "Superiority Effects with Multiple Wh-Fronting in Serbo-Croatian," *Lingua* 102: 1-20.
- Bresnan, Joan (1977) "Variables in the Theory of Transformations," *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 157-196. Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean Roger Vergnaud*, ed. by Robert Fraidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Culicover, Peter (1993) "Evidence against ECP Accounts of *that-t* effect," *Linguistic Inquiry* 24: 557-561.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface*. Oxford University Press, New York.
- Grebenyova, Lydia (2006) *Multiple Interrogative: Syntax, Semantics, and Learnability*, Doctoral Dissertation, University of Maryland.
- Grewendorf, Günther (2001) "Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 32: 87-122.
- Grohmann, Kleanthes K (1997) "German Superiority," *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 40: 97-107.
- Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Lohndal, Terje (2007) "*That-t* in Scandinavian and elsewhere: Variation in the Position of C," *Working Papers in Scandinavian Syntax* 79: 47-73.
- Maling, Joan and Annie Zaenen (1990) "The nonuniversality of a surface filter," *Syntax and Semantics, volume 24 Modern Icelandic Syntax*. ed. by Joan Maling and Annie Zaenen, Academic Press, San Diego, California.
- Pesetsky, David (1982) "Complementizer-Trace Phenomena and the Nominative Island Condition," *The Linguistic Review* 1, 297-343.
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The represen-*

- tation of (in) definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice ter Meulen, 98-129, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequence," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 355-426, MIT Press, Cambridge, MA.
- Richards, Norvin (2001) *Movement in Language - Interactions and Architectures* -, Oxford University Press, New York.
- Rudin, Catherine (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH Fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Scott, Tatiana V (2012) *Whoever doesn't HOP must be Superior: The Russian left-periphery and the Emergence of Superiority*, Doctoral dissertation, Stony Brook University.
- Szcegielniak, Adam (1999) "'That-trace Effects' Cross-Linguistically and Successive Cyclic Movement," *MIT Working Papers in Linguistics* 33.
- Sobin, Nicholas (2009) "Prestige Case Forms and the Comp-trace Effect," *Syntax* 12: 32-59.
- Sobin, Nicholas (2010) "Echo Questions in the Minimalist program," *Lingua* 81: 141-167.
- Stjepanovic, Sandra (2003) "Multiple Wh-Fronting in Serbo-Croatian Matrix Questions and the Matrix Sluicing Construction," *Multiple Wh-Fronting*, ed. by Cedric Boeckx and Kleantes K. Grohmann, 255-284, Benjamins, Amsterdam.
- Stroik, Thomas (1996) *Minimalism, Scope, and VP Structure*, SAGE Publication, London.
- Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press, Oxford.

Abstract

This study explores Superiority, Comp-trace Effects and the related phenomena and shows that they can be explained uniformly by general principles/assumptions: (a) Economy of Derivations, in which UG selects as optimal the sentence which can be derived with the least cost, and (b) the property of Comp C which is assumed to have Tense features as well as clause type features. Contrary to previous assumptions, we point out that “Attract Closest” principle cannot account for Superiority Effects and the related facts, and argue that the relevant facts of Superiority and Comp-trace phenomena can be attributed to the consequences of subject vs. non-subject asymmetry.

Through the cross-linguistic investigation of Superiority and Comp-trace phenomena, we demonstrate that there is a significant implicational relation about the observance of Superiority and Comp-trace effects among typologically different languages, including English, German, Dutch, Bulgarian, Serbo-Croatian, Russian, Spanish, and Icelandic. Furthermore, even though the universal principle regulates the behavior of these languages in terms of subject /non-subject asymmetry, the property of Comp and the T feature in subjects can be parametrically determined in a particular language.

In this article, we attempt to show that the seemingly complex linguistic phenomena involving multiple-wh-questions and the possibility of wh-extractions can be explained by simple underlying principles. Under the proposed analysis, what has been called Superiority effects and the other related facts concerning subject/non-subject asymmetry can be reduced to the consequences of general principle of derivations and the property of Comp which has to be checked with both clause-type and T-features.

Keywords : *Superiority effects, Comp-trace effects, language variability, multiple-wh -questions*